

この本、いかがですか？

自信をもって母乳育児を 適切に導くために

日本医科大学武蔵小杉病院教授・新生児科部長
島 義雄

「授乳中のお薬」に関する不安や疑問に、自信をもってお答えするのが難しいのは、信頼に値する情報になかなか辿り着けないからではないでしょうか。本書は、薬剤の母乳移行と授乳のリスク分析に特化したデータや文献を提供し続け、原著で既に20版を重ねる定評あるリファレンスの待望の邦訳です。その場で素早く参照ができるように、一般名で五十音順に掲載された薬剤には、国内で流通する商品名と薬効のカテゴリ、そして何より今すぐ知りたい授乳の危険度がひとめで分かるように手際よくまとめられています。

「母乳で育てる」は、いまや社会全体の意識となり、たとえ母親に服用治療の必要があっても、授乳を続ける上での影響が小さいと判断できれば、私たち医療

者は積極的にそれを励ます立場にあります。「安全性に関する十分なデータがない」という添付文書を盾に、母乳をあきらめることに躊躇のなかった時代とは隔世の感です。実際、ほとんどの薬剤は適正に使用されていれば授乳を控える必要はないのですが、根拠もなく「大丈夫」と言うのも、やはり責任ある態度ではありません。また、母乳に固執するあまり服薬を中断させて、母親が健康を害するようであれば本末転倒というものです。

本書では、掲載されている薬剤について、母乳移行性の客観的な判断材料となる薬物動態に関する指標(半減期、分子量、蛋白結合率など)が示され、解説と文献を参照することができます。その上で、授乳が安全なものから、明らかな禁忌まで5段階に分類され、中間群について

ヘイル 薬と母乳

MMM 原書 第20版

- ・監訳：林 昌洋，笠原英城
- ・定価：13200 円(本体 12000 円+税 10%)
- ・判型：B5
- ・頁：632
- ・発行：2023 年 06 月
- ・ISBN：978-4-260-05266-5
- ・<https://www.igaku-shoin.co.jp/book/detail/112241>



でも過去の事例や研究結果に基づいて階層化されているので，説得力があり信頼性の高いリファレンスとなっています。

本書の代表者である Hale 博士は，母乳育児に最高の価値を与えながら，母親の健康がその大前提であり，治療と授乳は両立すべきとの立場を明らかにしています。したがって，一律にリスク分類を適用するのではなく，個々の当事者(母親，医師，薬剤師)が十分な論議で合意を形成し，投薬を受けながら授乳を続けることの利益・不利益を主体的に判断することを求めています。そのために，治療薬に限らず，検査や診断に用いる薬品から，消毒剤，嗜好品，病原体に至るまで，およそ授乳中の母親が曝露される可能性のあるものなら徹底的にデータや文

献を蒐集したと宣言しています。私たち医療者が，自信をもって母乳育児を適切に導くことができるように，強い使命感と自負をもって編纂された本書は，必要な薬剤を探し読みするだけではもったいない内容になっています。

最後に，本書が第一線の病院薬剤師の皆さんの手による翻訳書であることを申し添えなければなりません。あらゆる診療科にまたがる膨大な臨床薬理の知識をもち，日頃から患者さんたちに直接相手している方々のお仕事であるからこそ，臨場感のある，きめの細かい日本語版が出来上がりました。本書が，母乳育児相談に携わる機会のある全ての職種に利用されることが，チーム医療の実践そのものになると信じています。